

ならば、近世西欧の認識論的構造がどのように変化したか、「経験」概念の変遷を軸として一度概観してみることが有益である。近世に一つの宗教的学知として神学の体系から自律しつつあった神秘主義の学知は、スコラの学知との対立を通じて自らの輪郭を獲得したともいえるが、「経験」は最大の争点の一つであった。スコラの学知の一般性に対して、神秘主義の学知の基盤である経験の個別性を擁護したスユランだが、背景には十六、十七世紀に起こった西欧の認識論的構造の転換が認められる。いわゆる科学革命は、自然哲学におけるアリストテレス的な秩序の崩壊を意味したが、それには新しい経験概念の構成が決定的であった。すなわち、それまで自然内に生起する事象についての一般的言明であった経験は、十七世紀に特定の状況下の特定の観察者である私の経験＝実験を意味するようになったのである。このことは学知の「確からしさ」を保証する根拠の重心が社会的に付与される信憑性から個人の直接的認識へと移行したことを表してもいる。個別的経験の特権性は歴史の産物なのだ。実際、たとえば中世末期のスコラ神学者ジャン・ジェルソンは、神秘神学が自然哲学と同じく「一般的経験」に基づいていること、それゆえその獲得のためには個別の経験よりもはるかに「信憑性を与える同意」が重要であるとたしかに述べている。学知における「私の経験＝体験」の優勢は十六世紀の「新世界」旅行記にもよくみてとれるが、とりわけ西欧の法における「証言」概念の変質と結びついていた。個人の直接的体験によって獲得された知識をもたらす「目撃証言」が、西欧近世に新しい証言の原理として、信に支えられた倫理的対話

的関係の中でのみ効力をもつ「倫理的証言」にとって代わった。かくして我々は、個別的体験を中心とする近代的神秘主義理解を歴史的に相対化し、「体験の学知」への別の視座——証言論——を示唆した。この視座から、体験と並ぶもう一つの神秘としてスユランが語っている信仰を考えると、何が言えるだろうか？

諸伝統における「宇宙的聖歌・祈り」の

概念をめぐる考察

リアナ・トルファシユ

様々な伝統や歴史上の時代における文献の中に、宗教学者は「宇宙的讚美」と呼び得るような一つの主題を見出す。この「宇宙的讚美」とは、あらゆるものが——自らの本性および、存在論的な階梯の内でも占めている地位に従って、自らが為し得る仕方——神ないし神々を讚美していると考えられる、という概念である。たとえば、天使たちは様々な言葉によって神を讚えていると言われるが、彼らは靈的な存在である限りにおいて、ただ靈的な仕方によってのみそれを為し得る。同様に、様々な動物や植物、鉱物などもまた、それぞれに相応しい仕方でも神を「讚えている」のである。

以下に、宇宙的讚美は具体的にどのように表されているかをよりよく分かるように、その様々な表現の中から幾つかを挙げ

(1) 「天において主を賛美せよ。……日よ、月よ、主を賛美せよ。……主の御名を賛美せよ。……火よ、雹よ、雪よ、霧よ、……山々よ、すべての丘よ、実を結ぶ木よ、杉の林よ、野の獣よ、すべての家畜よ、地を這うものよ、翼ある鳥よ、地上の王よ、諸国の民よ、……主の御名を賛美せよ。主の御名はひとり高く」(詩編第一四八詩)。

(2) 「語るものも語らないものも、皆汝を讃える。思惟するものも思惟しないものも、皆汝を崇める。……全てのものは汝に祈りを捧げる」(ディオニシオス・アレオパギテスに帰せられた讃歌)。

(3) 「すべてのものはそれが属する段階に従って祈り、鎖の全体を統率するものへの讃歌を歌う。……蓮の花は太陽の光が差す前には閉じているが、太陽が現れて最初の光が差すと、ゆっくりと開く。そして、太陽が昇りきると満開となり、太陽が西へ行くと、閉じる。ではたして、人間が口や唇を開けたり閉じたりして太陽への讃歌を歌うのと、蓮が花卉を閉じたり開いたりするのは異なったことであろうか。というのも、花卉は蓮にとつて口の代わりとなるものであり、「蓮が太陽の動きに伴い花卉を開閉するのは」自然の讃歌であるので」(プロクロス『神的秘術について』)。

(4) 「七つの天と大地と、そこにあるいっさいのものは、神を讃える。神の光栄を讃えないものはない。ただおまえたちには、それらの賛美がわからないだけである」(『クルアーン』一七・四四)。

(5) 「汝はあらゆるものが——識別できるものも、そうでな

いものも——汝を讃えるようにさせたため、それぞれのものは異なった仕方でも汝を讃美している。……人は生命を持たないものによつて捧げられる讃美の言葉を信じないが、それらの生命を持たないものが、讃美に関する師となった」(ルーミー『精神的マスナヴィー』)。

(6) 「どの花も、うっとりさせるような千の艶姿をもって、哀願とともに神を褒め讃える。鳥たちは心地よい声で、その「王」への連禱を朗誦する」(ユヌス・エムレ)。

その興味深さにもかかわらず、この主題に関する研究は希少であるように思われる。ある特定の伝統に関するものさえ十分に顧みられることはないし、比較研究の観点に立った同様の研究を見つけ出すことは、非常に困難であると言つてよい。

本発表の意図は、諸文献(聖書やキリスト教、新プラトン主義、さらにはスーフィズムにおける宇宙的讃美に関連した文献)の紹介および分析を通じて、宗教学の分野においてこれまで言及される機会の少なかった「宇宙的讃美」という主題がもつ重要性に対して注意を喚起し、もつて同主題に関する将来の研究を促進することにあつた。

ユングの『世界観』についての一考察

杉岡正敏

ユングはR・オットーのヌミノーズ体験論に大きく影響を受けている。オットーの狙いは単なる宗教的感情の非合理面の強